

佳 作

# ヨーロッパ人の見た 戦国時代の日本

—ヨーロッパ人と日本人、どちらが先に文明人になったのか？  
—真の近現代史理解の一つの鍵

やました  
山下 英次 71歳

大阪市立大学名誉教授・経済学博士  
国際歴史論戦研究所(iRICH)所長

(目次)

イントロダクション

ヨーロッパ最初の文明人は、ルネッサンス期のイタリア人

ヨーロッパの宣教師たちが見た戦国時代の日本

日本の戦国時代は、世界の大転換期

明治維新が平和裏に実現した深層背景

おわりに

## イントロダクション

筆者は、これまで、GHQ史観(脱東京裁判史観)を根底から覆すような歴史認識を主張するいくつもの論文を書き、また、そうした立場から、実際に国際歴史論戦を展開してきた。2015年から2016年にかけての米国マクグロウヒル社の高校歴史教科書を巡るアメリカ歴史学会(AHA)の連中との歴史論戦を嚆矢として、そうした活動を続け、2018年11月には、国際歴史論戦研究所(iRICH)を設立し、よ

り組織的な枠組みで活動を展開している。

2018年8月16日には、ジュネーヴの国連欧州本部(パレ・ウィルソン)で行われた人種差別撤廃委員会(CERD)の日本審査の会期中に、同委員とNGOとの会合が持たれたが、その際、筆者は、「パリ講和会議の国際連盟規約検討委員会における日本の人種差別撤廃提案から100周年」と題するスピーチを行った<sup>1</sup>。これは、第二次世界大戦後ずっと国際社会を支配してきた東京裁判史観(GHQ史観)を根底から覆す内容である。「連合国」(The United Nations)を意味する国連の場で、このような主張がなされたのは、おそらく初めてのことと思われる。

また、2018年12月20日、イスラエルのテル・アヴィーヴ大学で開催されたイスラエル日本学会(IAS)主催の大規模な国際シンポジウム『日本がイメージする西洋/西洋がイメージする日本—明治維新から150周年』において、筆者は、「日本の人種差別撤廃提案から100周年—日本のパイオニア的な尽力のプリズムを通して近現代史の真実を見る」と題する学会報告を行った<sup>2</sup>。これも、東京裁判史観を根底から覆すような内容の報告であるが、主要な国際学会で、日本人の学者がこのようなスピーチをしたのも、間違いなく初めてのこととみられる。

当然のことながら、今後とも脱GHQ史観を、国際社会で大いに発表し続けていく必要があるが、この点を突き詰めていくと、それだけではなく、現在、世界的に普及しているヨーロッパ中心史観に基づく世界史の大きな流れについても改める必要があることを痛感する。ヨーロッパ中心史観とは、19世紀のランケ史学、やマルクス主義史学が代表的なものであるが、これから脱却しなければ、世界史のより正しい理解は、決して得られないということである。速大な計画となるが、日本人によ

1 オリジナルの英文は、Yamashita [2019]。その邦訳は、山下英次 [2019]。

2 Yamashita [2018]。

3 レオポルト・フォン・ランケ (Leopold von Ranke, 1795-1886年)は、19世紀ドイツの指導的歴史家であり、近代歴史学の創始者とされる。

つて、世界史を書き改める必要がある。日本人が、世界史を書き直すという、野心的に過ぎるのではないかとみる向きもあると思うが、東京大学名誉教授の羽田正も指摘するように、世界史を構想する上で、むしろ日本の歴史研究は利点を有している。ヨーロッパ諸国の場合には、歴史学と東洋学が異なった学問分野として人類の過去を別々に分析するが、日本の場合には、100年以上前の明治期から今日に至るまで、日本史、東洋史、西洋史という3つの枠組みの下で、バランス良く世界各地・各時代の過去が研究されてきた。その意味でも、われわれ日本人こそが、世界史を書き改める資格が最もあると言えるのである。また、換言すれば、「正しいもの」や「先進的なもの」は、すべて欧米諸国からやってきたという、まだ多くの日本人の間で根強く残っている誤解や劣等意識もまた、払拭しなければ、日本の正しい近現代史の理解も得られない。その意味でも、脱ヨーロッパ史観が、是非とも必要とされるのである。

本稿では、ヨーロッパ人の見た戦国時代の日本を取り上げ、脱ヨーロッパ中心史観を展開していくこととするが、それが、真の近現代史理解の一つの鍵となることを示したい。そうしたことから、本稿の特徴をより正確に表すために、異例なことではあるが、メイン・タイトルの「ヨーロッパ人の見た戦国時代の日本」に加え、「ヨーロッパ人と日本人、どちらが先に文明人になったのか？」と「真の近現代史理解の一つの鍵」の2つの副題を付すことにした。

### ヨーロッパ最初の文明人は、ルネッサンス期のイタリア人

ヨーロッパ中心史観によれば、今日のヨーロッパ文明は、古代ギリシヤおよび古代ローマからずっと連続と引き継がれてきたということになるが、それは、全く事実と反する。そもそも、現在、ヨーロッパやイギリスにいる人達は、古代の人々と同じ場所に住んでいるわけであるが、古代ギリシヤや古代ローマの人達とは人種的に全く異なるし、文明も直

受け継いできたわけではない。中世のヨーロッパは、古代ギリシヤ・ローマに比べ、はるかに劣った文明しか持っていなかった。古代ギリシヤ・ローマの文明を受け継いだのは、むしろアラブ世界であった。古代ギリシヤ・ローマの重要な文献の多くは、アラビア語に翻訳されていた。また、すぐ東隣りの東ローマ帝国（ビザンチン帝国）と比べても、中世の西ヨーロッパは、遅れたみすばらしい地域であった。

そして、中世では、ヨーロッパの東方世界、すなわちアラブやトルコ、さらには、インドや中国が先進地域であり、ヨーロッパは後進地域であった。経済的にも、当時のヨーロッパは、木材、羊毛原料などの原材料を東方に輸出し、毛織物などの工業品を東方から輸入していた。すなわち、当時のヨーロッパは、一次産品の輸出地域に過ぎなかった。そして、そのヨーロッパと東方との貿易を仲立ちしていたのが、フィレンツェやヴェネツィアなどのイタリアの諸都市国家であった。

東方貿易の仲介者であったイタリアの諸都市には、アラビア語に堪能な人達がいたので、アラビア語に翻訳されていた古代ギリシヤ・ローマの古典をラテン語やイタリア語に翻訳する作業が盛んに行われた。他方、1453年、オスマン・トルコによって首都のコンスタンチノープルが陥落し、東ローマ帝国が滅亡すると、そこから追われた人々のイタリアへの亡命が急増した。東ローマ帝国で話されていた言葉は、ギリシヤ語だったので、イタリアの諸都市は、ギリシヤ語に堪能な人々をも抱えることになった。また、当時のヨーロッパで、知識人同士の共通語だったラテン語の識字率は、イタリアがずば抜けて高かった。このようにして、イタリアの諸都市は、当時のヨーロッパ・地中海世界の3大言語であったラテン語、ギリシヤ語、アラビア語のすべてについて堪能な人々を手中に収めることになった。その結果、イタリアの諸都市において、ギリシヤ語やアラビア語の古典からラテン語やイタリア語への翻訳作業が大いに進んだのである。

また、フィレンツェなどで、毛織物工業が起り、経済的な発展もたらされた。例えば、金融業で莫大な財を成したメディチ家は、フィレンツェ北方のムジエツェの出身で、元々は薬種商だったと言われる

が、毛織物業を興したことで発展が始まった。このようにして、フィレンツェをはじめとするイタリア諸都市国家の間で、工業化を通じた経済発展の進展を背景として、後世に、イタリア・ルネッサンス<sup>4</sup>と呼ばれることになる人文主義思想（ウマネージモ）をベースとする文芸復興運動につながっていった。今日のヨーロッパ文明は、このイタリア・ルネッサンスが起源である。すなわち、今日のヨーロッパ文明は、高々、600年前後に過ぎないのであり、古代ギリシャ・ローマ以来、2000年以上続いてきたわけでは全くない。

ところで、野蛮と文明を分けるものは、礼儀作法（*civiltà*）である。簡単に言うと、礼儀作法を知っている者が文明人であり、知らない者が野蛮人である。われわれ日本人は、昔から、外国人から礼儀正しいとよく言われてきた。筆者も、日本人がそうだとされると嬉しかったが、実は、それほどたいしたことではないと思ってきた。しかし、ヨーロッパの歴史を勉強していくうちに、礼儀作法が、野蛮と文明を分ける非常に重要な要素であることがはつきり分かるようになった。

ルネッサンス末期のイタリアで、礼儀作法に関する2つの重要な本が出版され、ヨーロッパ中に影響を与えた。これらの本が、ヨーロッパの他の地域に広がっていったが、その過程で、イタリア・ルネッサンスで開花した文明が普及していった。今日のイタリアは、ヨーロッパでそれほど尊敬されているとはいえないが、実は、学問、芸術、科学技術など、今日のヨーロッパ文明のほとんどすべてがイタリア起源である。イタリアは、まさしくヨーロッパ文明の源流である。

1528年、バルダッサレ・カステイリオーネ伯爵が、『宮廷人』(*Cortigiano*)<sup>5</sup>という本をヴェネツィアで発行した。この本は、イタリア中部のウルビーノ公国の宮廷儀礼について書いた本であるが、礼儀

4 ルネッサンス (Renaissance) というフランス語は、19世紀のフランス人の歴史家ジュール・ミシュレ (Jules Michelet) が、『フランス史』第7巻 (1855年) の中で、最初に使ったとされる。ちなみに、ルネッサンスは、イタリア語では、リナシメント (Rinascimento) という。

5 日本語訳は、バルダッサレ・カステイリオーネ [1987 (1528)]。

作法の書として、ヨーロッパの他の国々の貴族たちに読まれた。また、それからちょうど30年後の1558年、イタリア人の文学者で高位聖職者のジョヴァンニ・デッラ・カーサが『ガラテオー・良いたしなみの本』<sup>6</sup>を出版した。ちなみに、ガラテオー (*Galateo*) というのは、イタリア語で礼儀作法という意味であるが、この本は、他のヨーロッパ諸国でも、貴族だけでなくもう少し広い層に読まれた。このようにして、イタリアから徐々に他のヨーロッパ諸国に、礼儀作法が次第に広まっていった。当然のことながら、礼儀作法より先に、学問、芸術、科学技術が、イタリアから近い所から次第にヨーロッパの他の地域に広まっていった。

イタリアの礼儀作法は、まずフランスに伝わり、後に、経済的にフランスが最も豊かになるにつれて、フランスが礼儀作法の先生となった。ちなみに、今日の国際的な外交儀礼は、フランス式エチケットがベースとなっている。18世紀、イギリスの貴族たちの間で、自分の子弟を、何年間もかけてヨーロッパ文化の源流であるイタリアに遊学させた。その後、貴族だけでなく、有産階級などイギリス社会のかなり広い層にまで広まった。いわゆるグランド・トゥアー (Grand Tour) であり、基本的に、ローマあるいはナポリまで行って、引き返してきた。その際、通常、帰路、パリに立ち寄ったが、それは、礼儀作法を学ぶためであった。このように、簡略に図式化して言えば、礼儀作法は、ヨーロッパでは、イタリアからフランスへ、そして最後に、海を越えてイギリスに伝わっていった。ごく自然なことであるが、新たに豊かになったヨーロッパの人たちは、先達から礼儀作法や教養を学んできた。ここで抑えておかなければならない一つのポイントは、単にキリスト教徒であるというだけでは、文明人にはなれないのである。この点、キリスト教徒の間には、今日もなお、非常に大きな誤解があるのでないだろうか。

ところで、イギリスは、イタリアから遠く、また、海によって隔てられたために、イタリア・ルネッサンス起源のヨーロッパ文明が最も遅れ

6 日本語訳は、ジョヴァンニ・デッラ・カーサ [2000 (1558)]。

つて、世界史を書き改める必要がある。日本人が、世界史を書き直すという、野心的に過ぎるのではないかとみる向きもあると思うが、東京大学名誉教授の羽田正も指摘するように、世界史を構想する上で、むしろ日本の歴史研究は利点を有している。ヨーロッパ諸国の場合には、歴史学と東洋学が異なつた学問分野として人類の過去を別々に分析するが、日本の場合には、100年以上前の明治期から今日に至るまで、日本史、東洋史、西洋史という3つの枠組みの下で、バランス良く世界各地・各時代の過去が研究されてきた。その意味でも、われわれ日本人こそが、世界史を書き改める資格が最もあると言えるのである。また、換言すれば、「正しいもの」や「先進的なもの」は、すべて欧米諸国からやつてきたという、まだ多くの日本人の間で根強く残っている誤解や劣等意識もまた、払拭しなければ、日本の正しい近現代史の理解も得られない。その意味でも、脱ヨーロッパ史観が、是非とも必要とされるのである。

本稿では、ヨーロッパ人の見た戦国時代の日本を取り上げ、脱ヨーロッパ中心史観を展開していくこととするが、それが、真の近現代史理解の一つの鍵となることを示したい。そうしたことから、本稿の特徴をより正確に表すために、異例なことではあるが、メイン・タイトルの「ヨーロッパ人の見た戦国時代の日本」に加え、「ヨーロッパ人と日本人、どちらが先に文明人になったのか?」と「真の近現代史理解の一つの鍵」の2つの副題を付することにした。

### ヨーロッパ最初の文明人は、ルネッサンス期のイタリア人

ヨーロッパ中心史観によれば、今日のヨーロッパ文明は、古代ギリシヤおよび古代ローマからずつと連続と引き継がれてきたということになるが、それは、全く事実と反する。そもそも、現在、ヨーロッパやイギリスにいる人達は、古代の人々と同じ場所に住んでいるわけであるが、古代ギリシヤや古代ローマの人達とは人種的に全く異なるし、文明も直

接受継いできたわけではない。中世のヨーロッパは、古代ギリシヤ・ローマに比べ、はるかに劣つた文明しか持つていなかった。古代ギリシヤ・ローマの文明を受け継いだのは、むしろアラブ世界であった。古代ギリシヤ・ローマの重要な文献の多くは、アラビア語に翻訳されていた。また、すぐ東隣りの東ローマ帝国(ビザンチン帝国)と比べても、中世の西ヨーロッパは、遅れたみすほらしい地域であった。

そして、中世では、ヨーロッパの東方世界、すなわちアラブやトルコ、さらには、インドや中国が先進地域であり、ヨーロッパは後進地域であった。経済的にも、当時のヨーロッパは、木材、羊毛原料などの原材料を東方に輸出し、毛織物などの工業品を東方から輸入していた。すなわち、当時のヨーロッパは、一次産品の輸出地域に過ぎなかつた。そして、そのヨーロッパと東方との貿易を仲立ちしていたのが、フィレンツェやヴェネツィアなどのイタリアの諸都市国家であった。

東方貿易の仲介者であつたイタリアの諸都市には、アラビア語に堪能な人達がいたので、アラビア語に翻訳されていた古代ギリシヤ・ローマの古典をラテン語やイタリア語に翻訳する作業が盛んに行われた。他方、1453年、オスマン・トルコによつて首都のコンスタンチノープルが陥落し、東ローマ帝国が滅亡すると、そこから追われた人々のイタリアへの亡命が急増した。東ローマ帝国で話されていた言葉は、ギリシヤ語だつたので、イタリアの諸都市は、ギリシヤ語に堪能な人々をも抱えることになつた。また、当時のヨーロッパで、知識人の間の共通語だつたラテン語の識字率は、イタリアがずば抜けて高かつた。このようにして、イタリアの諸都市は、当時のヨーロッパ・地中海世界の3大言語であつたラテン語、ギリシヤ語、アラビア語のすべてについて堪能な人々を手中に収めることになつた。その結果、イタリアの諸都市において、ギリシヤ語やアラビア語の古典からラテン語やイタリア語への翻訳作業が大いに進んだのである。

また、フィレンツェなどで、毛織物工業が起り、経済的な発展もたらされた。例えば、金融業で莫大な財を成したメディチ家は、フィレンツェ北方のムジッコの出身で、元々は薬種商だつたと言われる

て到達した。そうしたこともあり、イギリスは、長年、ヨーロッパの周辺に位置する弱小国であり続けた。そして、ある時期、急速にのし上がった国である。今日のイギリスの国の形がほぼ出来上がったのは、スコットランドを併合した1707年であり、僅か300年余りの歴史しか持たない国である。なるほど、アメリカ合衆国よりは歴史が古いが、それも僅か69年間に過ぎないのである。世間一般にイメージされているイギリスの歴史は、かなり過大評価されていると言わねばならない。

### ヨーロッパの宣教師たちが見た戦国時代の日本

16世紀、戦国時代の日本には、ヨーロッパの宣教師たちが何人もやってきた。ポルトガル人、イタリア人、スペイン人などイエズス会の宣教師たちである。当時のヨーロッパの知識人が渡来し、長期間日本に滞在し、日本と日本人がある程度体系だつて観察され、西洋に紹介された。1570年発行の『コインブラ書簡集』（対象期間1549～1566年）や1598年発行の『エヴォラ書簡集』（対象期間1549～1589年）など、日本に関する膨大な記録が書き残された。今日のわれわれは、彼らの著作を通じて、当時の世界の中の日本の位置づけを知ることができる。すなわち、当時の日本社会や日本人の文明の程度を、ヨーロッパとの比較の中で知ることができるのである。

その中で最も詳しいのは、ポルトガル人宣教師のルイス・フロイスの『日本史』<sup>7</sup>である。フロイス（1532～1597年）は、1563年に来日して以来、通算約31年間日本に居住し、織田信長と合計18回も面会した。フロイスの『日本史』は、編年体の膨大な歴史書で、フランシスコ・ザビエルが来日した1549年から1593年までを対象としている。残念ながら失われてしまった部分もあるが、多くの部分は残り、現在、全12巻の日本語訳がある。日本の戦国時代に関する同時代の歴史

書としては、最も重要なものの一つとされている。アルファベットで書かれているため、当時の漢字の発音が、おおよそどのようなものであったかを知ることができるという意味でも貴重である。

フランシスコ・ザビエル（1506～1552年）は、スペイン人で、最初にやってきた宣教師である。日本に僅か2年余りしか滞在しなかったが、彼の日本観察の目は鋭い。元UBS（スイス・ユニオン銀行）日本代表で、日本に30年間以上滞在したヴィットーリオ・ヴォルピは、自身の著書で、「ザビエルは、今でも日本人を特徴づけている多くの美質、人間の尊厳、礼儀と形式、ホスピタリティ、清潔感、異なった階級における互いに対する尊重心などを、鋭く嗅ぎ取っている。また、多く（の人々）が読み書きができ、新しい文物を学ぼうという意欲にあふれている。」<sup>8</sup>と述べている。すなわち、ザビエルは、日本人の精神性の高さ<sup>9</sup>と教育水準の高さを称賛している。また、ザビエルは、「日本は大きかった。長さが3000kmあり、約2000万人もの人口があり、（当時の）ヨーロッパの大国と比べても、遙かに人口が多かった。」<sup>10</sup>と述べている。ザビエルとともに日本にやってきたスペイン人宣教師のコスメ・デ・トルレス（1510～1570年）は、「新たに発見された世界においては、新しいキリスト教徒のうち、日本人に優り、もしくは彼ら以上に明晰な理解力を有する国民はいないと思われます。」<sup>11</sup>と述べている。

また、中部イタリアの伯爵家出身のアレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539～1606年）は、「日本人は世界で一番利口な国民である。理性が教えることに従うことを愛し、したがって、われわれより優れている。主が人に何を与え給うたかを見たいと思う者は、日本に来て、見ることがよい。彼らの中に入り、彼らと関係を作る者は、彼らをよく導くことができる。彼らを理解できず、話し合えない者は、窮地に陥るしかない。」<sup>12</sup>と、最大限の賛辞を寄せている。ヴァリニャーノは、イエズス

7 ヴィットーリオ・ヴォルピ [2008], p.198

8 ヴィットーリオ・ヴォルピ [2008], p.198

9 川崎桃太 [2006], p.289

10 ヴィットーリオ・ヴォルピ [2008], pp.84-85

7 日本語訳は、ルイス・フロイス [2000 (1994)], 『完訳 フロイス 日本史 (1)

』 (12), 中公文庫

会東インド全権巡察師 (visitatore) で、アフリカの東海岸からインド、マレー、中国、日本にまでに至る非常に広範な地域をカヴァーした非常に高位のイエズス会宣教師である。彼は、33年間にわたってアジアに滞在し、そのうち、日本には3度、通算10年間滞在した。当時のヨーロッパの先進地域であったイタリアの上流階級出身であり、後期ルネッサンスの知識人であった。また、ヴァリニャーノは、「われわれは、(日本人から)、野蛮人で嫉の悪い人間とみられていたのである」<sup>12</sup>とも述べている。このように、宣教師の間で、日本の礼儀作法(とりわけ仏僧の作法)に学び、それに従うべしとの意識が強くなっていった。

ルイス・フロイスは、「われわれは、すべてのものを手をつかつて食べる。日本人は男も女も、子供の時から二本の棒を用いて食べる。」<sup>13</sup>と述べている。すなわち、宣教師たちは、食べ物を手で掴んで食べていた。それは、ヨーロッパ人の間で、フォークを使うという習慣がまだ普及しなかつたからである。食事の時、フォークを使うという習慣がイタリアからフランスにもたらされたのは、1533年、フィレンツェのメディチ家の娘カテリーナ・デ・メディチが、フランス王家に輿入れした時である<sup>14</sup>。その際、のちのフランス料理のベースとなるトスカーナ料理と食事の際にフォークを使用する習慣がフランス王家に伝えられた。ヨーロッパ人の間で、食事をするとき、フォークを使う習慣が一般的に普及したのは、17世紀に入ってからのことである。肉を手で掴んで、口の周りを血だらけにして食べ、風呂にもほとんど入らなかつた宣教師たちが、当時の日本人にとって、野蛮人に見えたとしてもそれほど不思議ではない。なお、京都外国語大学名誉教授の川崎桃太は、フロイスの日本人評について、以下のようにまとめている。「日本人の慎み深さと嫉の良さは天性のもの。日本人は、本性優しく、多感な持主。ただし欠点も見逃しておらず、日本人は一般に秘密を守ることでは余り信

用のおけぬ国民。」<sup>15</sup>

ヴァリニャーノは、伊東マンシヨを主正使(受洗大名である大友宗麟の名代)とする天正遣欧使節団(4少年)をヨーロッパへ送った。先にも述べたように、ヴァリニャーノは、アフリカ東海岸から日本に至る非常に広範な地域をカヴァーするイエズス会の責任者であったから、インドからでも、中国、マカオからでもどこでもよかつたはずであるが、彼は、日本から使節を派遣することを選んだ。それが全てを物語っている。実際、ヴァリニャーノは、「彼ら(4少年)は、ヨーロッパ人の目に、極度に文明化された国からの客人と映るだろう」<sup>16</sup>と述べている。

天正遣欧使節団は、1582年(天正10年)2月、長崎港を出港し、1590年(天正18年)7月に帰着した。8年5カ月間の全行程であったが、ヨーロッパへの滞在は、合計1年8カ月であった。ときのローマ教皇グレゴリウス13世<sup>17</sup>の格別の歓迎が端緒となつて、訪問するどの町でも、競い合つて、少年使節を迎え入れた。高貴な東洋の少年たちの立ち居振る舞いは、礼儀正しく、上品で控え目であった。外見は、素朴さ、善良さ、優しさを示していた。ヴァリニャーノは、「おそらく、ヨーロッパへの使節団がこれほどの歓迎を受け、これほどの証言や記録を残している例はほかにないだろう。彼らが各地で目覚めさせた関心や記憶は途方もなく大きく、使節団がヨーロッパを離れてからも長く続くのである。」<sup>18</sup>と述べている。16世紀にヨーロッパにやってきた外国使節としては、最大のセンセーションを巻き起こした。少年使節の訪問後、数年間で、ヨーロッパで、90種類以上の関連出版(本や冊子)が実現したことが、そのことをよく物語っている。その中で最も有名なものは、グイド・グアルティエリ著の『リスボンからローマに至る日本使節来訪記』であり、1586年、ヴェネツィアで発行された。

- 12 ヴィットーリオ・ヴォルピ [2008], p.212  
 13 ルイス・フロイス [1991 (1585)], p.92。  
 14 カテリーナ(フランス語ではカトリーヌ・ドゥ・メディシス)の夫は、後にフランス国王アンリ2世となる。

- 15 川崎桃太 [2006], p.289。  
 16 ヴィットーリオ・ヴォルピ [2008], p.119  
 17 ローマ教皇グレゴリウス13世(在位1572~1585年)は、1582年、ユリウス歴からグレゴリウス歴に改暦したことで知られる。  
 18 ヴィットーリオ・ヴォルピ [2008], p.128

当時のヨーロッパ人たちは、日本社会が、自分たちとは全く違うやり方で、既に文明社会になっていたことに驚いた。すなわち、日本人については、戦国時代において、既に、礼儀作法を心得た人、すなわち文明人であったという国際的な評価が確立していたのである。しかも、それについては、宣教師たちによる膨大な文献が遺されているのである。ヨーロッパが文明社会になったのは、ルネッサンス期のイタリアからであり、当時、ヨーロッパ全体としては、文明社会になったばかりか、あるいは、まだなっていない地域も少なくなかったであろう。他方、日本は、当時、既に文明社会になっていたわけであり、おそらく戦国時代よりかなり前から文明社会になっていたものと考えられる。他方、例えば、ポルトガルの識字率は、19世紀に入ってからでさえも、10%以下にしか過ぎなかった。すなわち、本稿の第1番目の副題である「ヨーロッパ人と日本人、どちらが先に文明人になったのか?」についての答えは、日本人の方が先である。

## 日本の戦国時代は、世界の大転換期

ヨーロッパの宣教師たちが日本にやってきた16世紀後半は、日本では戦国時代(15世紀末〜16世紀末)の後半であり、ヨーロッパは、ルネッサンス期(1300年頃〜1600年頃)の末期であった。また、ヨーロッパは、宗教改革(16世紀)の時代でもあり、大航海時代(15世紀半ば〜17世紀半ば)の前半でもあった。別の言い方をすれば、世界の中でヨーロッパが、ようやく先進地域になり始めた時代であり、また、ヨーロッパ人が文明人になり始めた頃である。ここで注目しておくべきポイントは、ヨーロッパ人は、自分たちが、文明社会になる前から、今日、大航海時代として知られるような対外的な軍事侵略を開始していたという点である。その後、ヨーロッパ諸国は、海外植民地獲得競争に走り、1800年頃には、全世界の35%、20世紀初めの第1次世界大戦前には全世界の85%を、自分たちの植民地として、手中に収めていた。

いずれにせよ、このように、日本の戦国時代は、ちょうど世界史の大転換期に当たっていた。大きな基調としては、世界の中心が、「東から西へ」移動しつつある時代であった。そして、21世紀前半の今日、世界の中心は、また、反対に、「西から東へ」移動しつつある。あるいは、換言すれば、世界の中心は、東へ戻ろうとしている。

## 明治維新が平和裏に実現した深層背景

明治維新は、300程度の諸藩から成る封建的な幕藩体制から近代的な統一国家に変えるという国家の一大変革であったが、世界史に前例を見ないほど、比較的平和裏に実現した。フランス革命では約100万人、アメリカの南北戦争では約50万人の死者を出したが、明治維新では、犠牲者は最小限にとどまった。戊辰戦争と西南戦争で合計2万人強、刑死者を合わせても、約3万人前後に留まった。また、1853年(嘉永6年)にペリーの黒船が来航してから僅か15年後に、明治維新が実現した。極めて迅速かつ犠牲者を最小限にとどめた形で、国家権力の中心の移行を伴う一大変革が実現したわけであるが、その背景として、以下の6点を挙げる事ができる。

第1に、既にみてきたように、日本は、16世紀の戦国時代には、既に文明社会であるという国際的な評価を確立していた。日本は、当時の最新の科学技術は持たなかったかもしれないが、ヨーロッパ諸国よりも遥かに先に文明社会になっていた。

第2に、幕末期における日本の就学率と識字率は、世界一、それも断然高かった。江戸の庶民の識字率は70%程度、江戸の中心部では90%であったが、同時代のロンドンでは10%程度に過ぎなかった。長きにわたって文明社会を築いてきたことに加え、人々の識字率も極めて高かったことから、幕末期、人々は、ヨーロッパ的な近代国家への変貌の必要性をよく理解できたのであろう。

第3に、わが国は、すでに古の時代から、近代民主主義に通じる基

盤があつたということである。まず、明治維新直前の1868年（慶應4年）、「五箇条の御誓文」として示された国是の第1箇条に、「広く会議を興し、万機公論に決すべし」と謳っている。さらに、今から1400年以上前、飛鳥時代の西暦604年（推古12年）、聖徳太子の「十七条憲法」の第17条で、「物事は一人で決めてはいけない。必ず他の者たちと一緒に議論して決めなさい。……中略……重要なことを議論して決める時には、過ちがあつてはならない。他の者たちと相談して判断するならば、道理の通つた結論が得られるであろう。」と謳っている。さらに言えば、「古事記」（712年）にも『日本書紀』（720年）にも出てくる神話時代の「天岩戸伝説」も、国家の一大事に際して、全国から八百万の神々を呼び寄せて相談している。こうした極めて長い伝統があるため、西洋近代国家流の民主主義を受け入れる素地が十分にあつたと言えよう。

第4に、1540年代前半に、種子島に鉄砲が伝来して以来、直ぐに、鉄砲の国産化に成功し、長篠の合戦（1575年）では、織田軍と徳川軍の両軍ともに大量の鉄砲が使われた。これは、当時の日本の工業水準が、すでにかなり高かつたことを裏付けるものである。

第5に、日本では、古の昔から、「和」が、極めて尊重されてきた。西暦604年（推古12年）、聖徳太子の「十七条憲法」が制定されたが、その第1条には、「和を以つて貴しと為し」と謳われている。さらに、16世紀の千利休は、茶道の心得を示す標語として、「和敬清寂」を強調した。さらに、慶應四年（1868年）に宣言された『五箇条の御誓文』の第2箇条の「上下心を一にして、盛に経綸を行ふべし」も、同じ精神であろう。このように、日本社会では、「和」、すなわち構成員の協調性が殊の外、重視されてきた。

第6に、日本では、2000年以上にわたって、万世一系の天皇制がずっと続いてきたことも、非常に重要な要素である。その結果、日本

19 長浜浩明は、『古事記』、『日本書紀』、『魏志倭人伝』などの古代の文献調査に、大阪平野の地質学的発達史を加味した極めて学際的な研究によって、初代の神武天皇の即位年を、紀元前70年だつたと割り出している。長浜浩明 [2019], p.132。

は、世界でも希にみる安定した社会を持続している。権威と権力を分離した天皇制は、世界史全体を通じて、社会・政治制度上の最大の発明であろう。これによつて、日本という国家が、基本的には同じ枠組みの下に、非常に長期間にわたって持続できた。これは、世界に全く類例のないことである。また、天皇制がなかったとしたら、権力の中心の移行を伴う明治維新が比較的平和裏に実現することはなかつたに違いない。

### おわりに

日本で言えば、戦国時代の頃に当たる15世紀半ばに始まつたヨーロッパ諸国による大航海時代 (the Age of Discovery) に、スペインとポルトガルは、不遜にも、両国で世界全体を勝手に2分する2つの条約を結んだ。「トルデシーラス条約」(1494年)と「サラゴース条約」(1529年)である。ヨーロッパ諸国による暴力的な植民地獲得競争の始まりである。しかし、実は、当時の両国は、いずれも急速に力を付けた新興国に過ぎなかつた。彼らが、レコンキスタ(失地回復)によつて、イベリア半島をようやくアラブの勢力から取り返したのは、1492年1月のことであつた。文明という点では、イタリア・ルネッサンス以来、ヨーロッパが初めて世界の先進地域となつた。いずれにせよ、その頃から、世界の中心が、「東から西へ」と向かう大転換が起つた。

そして、今また、世界の中心は、「西から東へ」と大転換しようとしているように見える。そのこと自体は構われないが、最も懸念されるのは、中国を中心として、全体主義的な国家が急速に勢力を伸ばす一方、アメリカの影響力の低下という事態に直面していることである。すなわち、アメリカ自身が理念にこだわらない事態が出現している。トランプ大統領は、おそらく、本音では、できることなら、ロシアのプーチン大統領のように、全体主義的に国を統治したいと願望しているに違いない。結局のところ、まともな自由民主主義国家は、日本と西ヨーロッパぐらいのものである。



そうした世界環境下で、日本の果たすべき役割は極めて大きい。本稿で明らかにしたように、日本は、ヨーロッパよりも先に文明社会になっていた。このことは、いわば国際的に認知されていたわけであり、戦国時代にやってきたヨーロッパの宣教師たちが遺した膨大な文献がそれを証明している。本稿で、ヨーロッパにおける礼儀作法の先生が、ルネッサンス期のイタリアから18世紀のフランスへ、そしてさらにイギリスへと移っていったことを示したが、今、世界の礼儀作法の一番の先生は、間違いなく日本であろう。礼儀作法(civility)は、文明社会のコアを形成するのであり、日本の礼儀作法を世界に弘めるべきである。そうすれば、世界はもつと平和に、そして、もつとましなものになるであろう。

自由民主主義の理念についても、日本は、世界を教導できる。すでに述べたように、1868年(慶應4年)の「五箇条の御誓文」にしろ、聖徳太子の「十七条憲法」(西暦604年)にしろ、西洋近代の民主主義の理念に通じるものであり、わが国の民主主義が、第2次世界大戦後、アメリカから与えられた『日本国憲法』が始まりなどではないことを明確に示している。わが国の歴史は、国の継続性の長さにおいては言うに及ばず、民主主義的理念においても、世界に冠たるものと言えるのである。

また、既に本稿で述べたように、日本人が、世界史を書き改めなければならぬ。そして、日本人が、その任に最も適している。

このように、わが国が、今日の世界を教導していくことが望ましいが、そのためには、日本自身が、どうしても改めておかなければならないことがある。

第1に、ある意味では、自虐史観を改める一環でもあるかもしれないが、「先進的な西洋」と「遅れた東洋」という世界観を払拭しなければならぬ。換言すれば、ヨーロッパ中心史観からの脱却ということである。あるいは、西洋に対する劣等意識の払拭ということである。例えば、「日本は極東の小さな島国である」といった表現を割合よく聞く。この表現は、私も、子供の頃、確か学校で習った記憶がある。これは、一体、誰が言い出したのであろうか？これも、日本を貶めるためのGHQ

のプロパガンダの一環だったのであろうか？日本がもしそうなら、「イギリスは極西の小さな島国である」ということになる。私は、しばらくイギリスに住んでいたことがあるが、イギリス人からこのような表現を聞いたことは、無論、一度もない。本稿で、フランシスコ・ザビエルの言葉を紹介したように、人口においても、地理的な広がりにおいても、日本は、当時のヨーロッパでは比肩する国がなかったほど大きな国であった。種子島に鉄砲が伝来してから僅か半世紀余りを経た関ヶ原の戦い(1600年)の頃には、日本は、世界最大の鉄砲保有国になっていた。当時、既に、刀鍛冶など日本のテクノロジーが発達していたからである。今日、アメリカ、ロシア、中国、カナダ、ブラジルなどごく一部の例外的に大きな国と比べれば、日本の国土面積は確かに小さいが、それらの特別な国々を除けば、日本は、国土面積においても、決して小さな国ではない。「日本は極東の小さな島国である」というのは、事実関係としても正しくないし、それ以上に、このように自分自身で自国を卑下するようなことを、決して言うてはならない。日本は、昔も今も、世界の大国の一つである。

いま一つは、いまの日本にどうしても必要なのは、真の意味での独立国家になるということである。独立国家の3種の神器は、①自前の憲法、②国防軍、③本格的な国家情報機関とスパイ防止法、である。これらの3つがなければ、真の独立国家たりえない。現在、日本を取り巻く安全保障環境が極めて厳しくなっていることでもあり、早急に実現させる必要がある。

#### 【参考文献】

- ・ヴァリニャーノ、アレックスサンドロ [2007]、『日本巡察記』、平凡社東洋文庫、2007年9月
- ・ヴォルピ、ヴィットーリオ [2008]、『巡察師ヴァリニャーノと日本』、一藝社、2008年7月

- ・大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃 [2002]、『岩波 キリスト教辞典』、岩波書店、2002年6月
- ・鹿毛<sup>かげ</sup>敏夫 [2015]、『アジアのなかの戦国大名―西国の群雄割拠と経営戦略』、吉川弘文館・歴史文化ライブラリー・シリーズ、2015年9月
- ・カステイリオーネ、ヴァルダツサーレ [1987 (1528)]、『カステイリオーネ宮廷人』、東海大学出版会、(訳注) 清水純一、岩倉具忠、天野恵、1987年2月、原著＝Baldassarre Castiglione, *Il Cortegiano*, 1528 (Venezia)
- ・川崎<sup>ももた</sup>桃太 [2006]、『フロイスの見た日本』、中公文庫、2006年2月
- ・サルゲイロ、ディアゴ、『戦国の少年外交団秘話―ポルトガルの古城で発見された1584年の天正遣欧使節の記録』、長崎県南島原市、2014年3月
- ・デッラ・カーサ、シヨヴァンニ [2010 (1558)]、『ガラテオ』、池上俊一(監修)、『原典 イタリア・ルネサンス人文主義』、名古屋大学出版会、2010年1月、原著＝Giovanni Della Casa, *Galateo*, 1558
- ・長浜浩明 [2019]、『日本の誕生―皇室と日本人のルール』、WAC、2019年5月
- ・羽田 正 [2000]、『新しい世界史とヨーロッパ史』、*Journal of History for the Public*, pp. 1-9 大阪大学文学部西洋史学研究室、2000年
- ・羽田 正 [2001]、『新しい世界史へ―地球市民のための構想』、岩波新書、2001年11月
- ・フロイス、ルイス [1991 (1585)]、『ヨーロッパ文化と日本文化』、岩波文庫、(訳注) 岡田章雄、1991年6月
- ・フロイス、ルイス [2000 (1594)]、『完訳フロイス日本史(1)〜(2)』、(訳) 松田毅一、川崎桃太、中公文庫、2000年1月〜12月
- ・本多博之 [2015]、『天下統一とシルバークラッシュ―銀と戦国の流通革命』、吉川弘文館・歴史文化ライブラリー・シリーズ、2015年8月
- ・松田毅一、『天正遣欧使節』、朝文社、1991年12月
- ・ミルワード、ピーター [1998]、『ザビエルの見た日本』、講談社学術文庫、(訳) 松本たま、1998年11月
- ・村井章介 [2012]、『世界史のなかの戦国日本』、ちくま学芸文庫、2012年4月
- ・山下英次 [2019]、『パリ講和会議の国際連盟規約委員会における日本の人種差別撤廃提案から100周年』、『日本国史學』第14号、日本国史学会、啓文社書房、2019年11月、ジュネーヴ国連人種差別撤廃委員会(CERD) 日本審査の会期中に行われたCERD委員とNGOとの会合におけるスピーチ(2018年8月16日)
- ・若桑みどり [2003]、『アマテロ・ラガンツィー―天正少年使節と世界帝国(上)(下)』、集英社、2003年10月
- ・Yamashita, Eiji [2018], 'The 100<sup>th</sup> Anniversary of Japan's Proposal for the Elimination of Racial Discrimination: Viewing the Truths of Modern History through Prism of Japan's Pioneering Endeavor' at International Symposium *The West in Japanese Imagination/ Japan in Western Imagination: 150 Years from the Meiji Restoration* organized by Israeli Association of Japanese Studies (IAJS) in Tel Aviv University, Israel, Dec. 20, 2018, mimeo
- ・Yamashita, Eiji [2019], 'The 100<sup>th</sup> Anniversary of Japan's Proposal for the Elimination of Racial Discrimination within the Committee for Drafting the Covenant of the League of Nations at the Paris Peace Conference', *National History of Japan*, Vol.14, the Society of National History of Japan, Keibun-sha, Nov. 2019, Originally Speech at Lunchtime Briefings by the NGOs during the UN Committee on the Elimination of Racial Discrimination (CERD) 96<sup>th</sup> Session for Japan in Geneva (Palais Wilson) on August 16, 2018